

今年もあきる野の代表的な希少種であるトウキョウサンショウウオの産卵状況調査を行いました。その結果、市内で1609個の卵のうを確認しました(その一部は情報提供によるもの)。15年間の調査において、今年は例年並みの低数値となるとともに、産卵ができる地点は年々減り、限られてきています。その理由としては、開発や自然の悪化によって、昔から生息環境となっていた池や森林の消失はもちろんですが、外来種のアライグマなどの天敵による食害、飼育や販売目的などによる捕獲の影響も深刻です。実は、今年見直された環境省のレッドリストで

は、生息状況がよく反映され、トウキョウサンショウウオは、絶滅危惧IB類(EN)という高いランクに引き上げられました(市や東京都では以前から同ランク)。これまで、複数の産卵場所の整備やアライグマを捕獲するなどの保全活動を行ってきましたが、被害が見られる場所は多く、更なる対策が必要です。さらに、近年は冬～早春の水不足による乾燥化という逆風に見舞われています。特に、東京周辺は積雪がほとんど見られなければ、雪の季節の後の降雨量も少ないため、春の両生類の代表であるトウキョウサンショウウオ、ニホンアカガエルやヤマアカガ

エルの産卵に大きく影響します。2～3月頃は、湧水などが完全に枯れるほど寂しい状況になってしまう産卵場所も少なくありません。そして、3月下旬～4月頃は基本的にやっと雨量が増えて、池などに水が溜まるようになりますが、これらの両生類の産卵期に間に合わないというのが現状です。こうして、春の両生類の減少が印象強く、気候に適應できなくなっているこのような生き物の生息が特に危惧されます。あきる野の貴重な自然は宝物ですが、その存続は大いに我々人間の手にかかっています。来春は、もっと雨量に恵まれることを祈っています。他

にも、水場を大切にする、針葉樹の植林から生物多様性を高める森林への転換、自然のバランスを崩す外来種やシカの対策なども強化しなければ、トウキョウサンショウウオの話だけにかかわらず、自然全体の更なる悪化に繋がります。その悪化に伴い、我々人間の世界にもさまざまな形で被害がはね返ってくると思います。(パブロ)



トウキョウサンショウウオ